

現地研究・日生諸島 報告

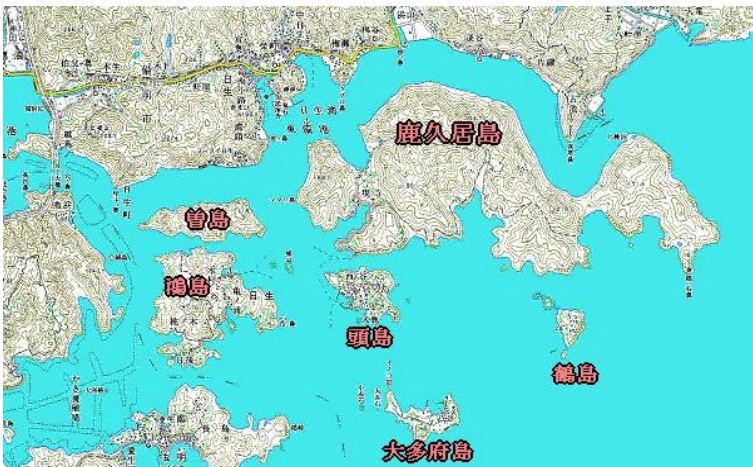
以下に、現地研究・日生諸島の実施報告を記す。内容は、次のとおりである。

- 1) 参加者募集の掲示用資料
- 2) 参加者のうちの1名、一條洸太君の事後提出レポートの抜粋と、そこに担当者・中俣の雑感などを加えたもの。(雑感は、文字ポイントを落とし、一條レポート中に、時間経過に従って挿入してある。

1) 参加者募集の掲示用資料

現地研究・日生諸島

[担当：中 俣]



ところ 岡山県備前市 日生諸島

目的 瀬戸内海東部、岡山県と兵庫県の県境に近い日生諸島(鹿久居島・頭島・大多府島・灘島)において、島の人々の生活を調べ見るとともに、瀬戸内島嶼部の過去・現在のありようと将来の姿に思いを馳せる。

日程 2011年11月20日(日)～11月22日(火) 2泊3日

- 1日目：JR赤穂線・日生駅前集合。駅のすぐ前の港から、船で頭島へ渡る(約30分)。
- 2日目：頭島から大多府島へ渡り、牡蠣養殖の現場を実見。島の産業のあり方などの調査実習。頭島へ戻る。
- 3日目：頭島と鹿久居島の間に架かる頭島大橋を歩いて渡り、再び頭島へ戻る。昼ごろ日生へ。午後3時過ぎ、現地で解散。

募集 文学部地理学科2～4年生、定員15名程度。

原則として先着順に参加を受け付けるが、学年ごとのバランスや男女の比率も考慮する必要があるため、場合によっては一部、抽選等で参加者を決定することがある。また参加募集は、定員に満たなくても11月8日(火)までで締切る。

費用 現地までの交通費、宿泊費（2泊分）、現地での船賃等の諸費用など、
合わせておよそ **¥45,000** 程度の予定。（例えば京阪神まで夜行バスを使うなど、安価な方法は各自で考えてほしい）

説明会 2011年11月10日(木) 午後6時40分～ BT1 3階地理学実験室

いかなる理由であれ、説明会に欠席したものは参加を認めない。

その他 使用する地形図 25000分の1：日生, 200,000分の1：姫路
参加者は説明会の時までに購入し、説明会に持参すること

申込み 参加希望者は、**予約金1000円**を添えて地理学科事務室(BT12 F)まで申込みこと。なお、説明会後に参加を取り消した場合、予約金は返還しない。

2) 一條レポート抜粋と担当教員雑感

1. はじめに

私は、前期のゼミで「田中健作(2010): 政策転換期における離島航路維持の展開—瀬戸内海を中心とした不採算航路を事例として—」の論文を読み、発表しました。この論文を読み、私は離島航路の現状が非常に厳しい状況に置かれていることを初めて知りました。論文の中で、海上交通は代替交通が不可能であり、定期航路が無くなれば死活問題となってしまいます。今後も継続的に運行するには、特に船員不足の問題をどう解決していくかが求められると書かれていました。しかし、過去に沖縄本島と小豆島くらいしか行ったことのない私にとって、離島に住む方々の生活がどのようなものか、離島航路とはどのようなものかイメージするのは難しいものでした。実際に現地に行って、自分の目で確かめてみたいなどと思っていたところ、今回、論文で対象地域とされていた瀬戸内海の島々の現地研究が実施されるということで、参加を決意しました。

2. 行程(スケジュール)

1日目～11月20日(日)

12:00 日生駅前集合。駅前から船に乗る。(12:10 日生駅前→12:50 頭島) 頭島に上陸し、満潮荘に荷物を置く。13:30 頭島を散策する。島々を一望できる、たぬき山展望台に上がる。展望台を降り、さらに北上し頭島大橋を下から見上げられる場所に行く。島の西側に向かい、ゲートボール場を発見する。島の中心部へ向かい、牡蠣処理場を見学。満潮荘に戻る。

……………船は、日生諸島と日生港とを結んでいる定期航路(大生汽船)。JR 赤穂線日生駅の西側約1kmにある日生港と日生諸島各島を結んでいる。日生駅前にもこの定期船が着く埠頭があり、われわれが

乗船したのは1日9便ある定期船のうちただ1便だけこの駅前の埠頭に立ち寄るものであった。

せっかくの好天で島々の景色が良く見えるのに、学生たちは多くが船室内にこもったきりで、あまりデッキに出て景色を楽しもうとはしない。あとで注意しよう！島には各所に小さな畑があり、いろいろな作物が植えられている。それが何か、学生に尋ねてみるが、知らないものがいくつもある。ブロッコリー、ニンジン、トウガラシ、ダイコン、ネギ、……。イチジクを(果実として)食べたことのない学生が全体の4分の3もいたのには驚いた。一つためしに実を採って(!)食べさせる。イチジクはかつて島の特産品だったという。西洋イチジクではなく在来種。夕食には、茹でたシャコが山盛り。

2日目～11月21日(月)

6:45 起床 7:00 朝食 7:45 出発

8:00 頭島→8:10 大多府島 牡蠣処理場見学 大多府島散策

11:05 大多府島→11:15 頭島 昼食(弁当) 鹿久居島へ

日生架橋について役場の方から説明を受ける

頭島に戻る

15:30 民宿



……昨夜はこの時期の瀬戸内にしてはとても寒い夜だった。大多府島では、漁協から連絡してもらっていたカキ生産者の菱川さんの小屋へ。カキ養殖は1960年ごろに始めたものという。主として家族労働だが、今では中国人「研修生」(という名目の季節的雇用者)が数多くいる。彼らなしではやっていけないようである。カキの殻むきは、約半年間に集中して行われる仕事である。菱川さんの話によると、中国人らは別に海岸沿いの地域の出身者というわけではなく、帰国してからカキ養殖に携わる可能性もなさそうということだった。

3日目～11月22日(火)

10:05 頭島→10:25 日生 五味の市(休業日) 11:15 出発「かきおこ」を食べる 13:30 解散

3. 橋を架けることについて

事業概要

昭和58年から国や県に対して、陳情や要望活動を続けている一方、昭和62年から頭島町内会全戸が各世帯月500円の架橋貯金を始めるなど地元の熱意が国・県に伝わり、平成6年度に国庫補助事業として採択され、平成16年には鹿久居島と頭島を結ぶ頭島大橋が開通した。平成26年には本土と鹿久居島を結ぶ日生大橋が完成する予定。

……離島架橋とは、離島を離島でなくするもの、つまり島を本土と一体のものとする装置である。第二次大戦後の日本の離島振興政策の、いわば柱をなしてきたのが、この離島架橋建設であった。そこで目論まれたのは、いうまでもなく経済的な後進地域としての島々を、その境遇から脱却させることだった。がしかし……。その結果生み出されたものは、本当に島に住む人々にとって、そして島にすまない人々にとっても、より望ましい生活空間だったのか？ 今回の現地研究で参加者に考えてほしかったことの一つはそういうことだった。架橋政策に対しての是非が、とりあえず問題なのではない。そのことについて、どのような体験をもとにどのように考えるか。大切なのはそのことである。

整備効果・将来展望

架橋事業の完成により、人・物・情報が随時にしかも低コストに短時間で流れることにより、離島地域の隔絶性の解消はもとより、利便性の向上、医療など安全性の確保、観光の広域化、産業振興、人口の定住化など地域に多大の便益と発展への可能性をもたらす。

意見

私は、橋を架けることに反対である。確かに、島で生活することには不便なことが多々あると思う。しかし、利用状況や建設費用から見て必要性はないと感じた。架橋したとしても、備前市（日生側）の方で期待していることの実現性は低いように思えた。低コストで短時間で人・もの・情報が流れることは可能だと思う。ただ、流動化することは、人口の流失も意味するのではないか。島に用があっても、すぐに駆けつけることができるなら、環境の整った本土に住むのではないかと思う。また、ただでさえ狭い島なので、これ以上家を建設することは不可能なように思えた。それ以外にも、離島地域の隔絶性の解消とあるが、これは今まで形成されていた住民の輪の崩壊を意味するのではないかと思う。しかし頭島の人たちは住民の輪が崩壊するという危険性も察知せず、架橋を熱望しており、一世帯毎月 500 円貯金をして架橋を訴えてきた。最も利用するであろう島民が、こういった訴えを起こしたため架橋に拍車がかかってしまった。役場の方の話の中で、鹿久居島の開発もしたいとのことだったが、具体性に欠けているものだった。平地の少なく、保護地で占められている鹿久居島での開発は難しいように思う。しかし、もう橋は建設されることが決定的になってしまい、後にも引けない状況になってしまっている。橋が架かった後、どのような変化をもたらすのか自分の目で確かめてみようと思う。

4. 頭島の感想

今回の現地研究は、頭島を基点にした。宿も頭島で、もっとも滞在時間の長い島となった。頭島は、日生諸島の中心的存在で、もっとも人口が多く、郵便局も置かれている。本土からも近く、約 20 分で行くことが出来る。しかし、近年民宿が減少傾向にあり、活気がなくなっている。また、島の中にいる若者のほとんどは、中国から研修で来た若者となってしまっていた。島の産業は、漁業くらいしかなく、若者が生きていくには島を離れて生活するしかないように思われた。観光客にとって、頭島の風景はどこか心が落ち着くものがあると思う。古い家が多く、懐かしさを思わせるものがあった。時間を忘れてのんびりしたいのならば、頭島に訪れるのがいいかと思う。個人的に、たぬき山展望台からの風景は絶景だった。ここから見渡すと、頭島が中心的存在だと痛感する。宿で頂いた魚は、新鮮でおいしかった。ミカンがあちこちにあり、小ぶりながらも味はおいしかった。

5. おわりに

私は、首都圏に属す埼玉に住んでいる。そのため、離島の自然豊かな環境は新鮮なものを感じる。今回、2泊3日という短い期間であったが、閉鎖的で邪魔されることのない空間で悠々と生きる方が、何もかも整った都市よりも人間的に充実した人生を送れるように私は思った。また、今回の現地研究で離島に非常に興味を持てた。今後、島巡りという新たな旅を始めようかと思っている。

……これからも、「離島」にぜひ関心を持ち続けてほしい。